

我がフィールドにて — 十勝川 —

土田 光子

今年の夏も我がフィールド—十勝川に、太い金ぶちメガネをかけてコチドリ 2羽が飛来していました。小粒な体で川原の上をチドリ足で忙しく動き廻っています。なにやら日本人の動きに似て苦笑します。時々版画のような顔で、ジーツと瞑（迷）悪にふけている？と「禅」をやっているようです。いいえ、考えすぎです。石ころに似せて忍者のつもりかな、くやしいけど私は老眼、近眼なので石ころにしか見えません。でも40倍の光科学機器の助けを借りて、バッチリ捉えることができました。北帰行をさぼったのかな、十勝川の中州には緑の葉をつけた流木もあって、かっこうの遊び場のようです。イソシギもセグロセキレイも同じ中州に居ます。セグロセキレイが餌を運んでいます。

おやっ！コチドリのすきとおった「ビューイビューイ」の声とは違う、にごって少しふとめで「ビイビイピー」と声がありました。プロミナーが中州に降りた鳥を捉えました。幸にコチドリと並んでいます。目はコチドリのような鮮明な金ぶちは見られない。版画のような顔は非常に似ているが境が少し太く長い。体も少し大きい。数年前、愛知県の汐川で珍鳥オオメダイチドリと共にシギ、チドリ類の識別を記憶したつもりであったのに、見事に忘れていた。一昨日、佐々木美恵子さんからイカルチドリらしい・・・と電話があったので、この日は図鑑を持参した。やっと、イカルチドリと確認しました。1羽と思って観てましたら4羽も居ます。ええっ！なんとその1羽の胸の前に小さな1羽の雛が寄り添っているのです。顔はまだぼやけていますが淡い茶色の毛に包まれて、しっかり立って、私の方を見つめています。愛しいです。我がフィールド—十勝川で新しい命を育てているのです。近くで西2条大橋の大工事をやっているのにもかかわらず、感動でした。雛の居る所で長居は禁物です。無事を祈りながら帰途につく私の足も喜びでチドリ足です。珍しくノゴマの雄とホオアカが美しい声で祝ってくれました。カッコウ、ウグイス、オオヨシキリ、コヨシキリが賑やかに大合唱です。オオジシギが、バリトンで参加です。イワツバメが白い腰をひるがえし、ショウドウツバメも入って舞っています。堤防の斜面のイタドリの葉かげで、ノビタキ、ヒバリが雛を育てています。1993年6月1日早朝の探鳥でした。

後日、音更町在住の島田氏も、音更側からイカルチドリ 2羽の雛を観察されたとのことです。帯広での繁殖記録は2例目でしょうか？この原稿を書き終えたら、釧路でのラムサール会議の最終日の内容等がテレビで報じられていました。

「我がフィールドにて」は、帯広在住の会員、土田光子さんが、1993年7月の「十勝野鳥だより」に載せられたものです。

夏鳥達が繁殖に戻ってくるのも間近です。鳥の営巣場所に近づき過ぎたり、或は、生まれた雛が可愛いと、長時間巣の近くにおいて、親鳥が雛に餌を与えられなかったり、人がつけた足跡のため、ヘビやカラスに巣の在り処を知らせる結果になったりもします。以前に比べ、鳥が減っているといわれる中で、悪意でないにしても、巣に近づき過ぎるなど、人間の側が鳥を追い込んでいることも多いのではないのでしょうか。文中にあるように雛のいる所で、長居は禁物という心遣いが嬉しく、ご本人の了解を得て、あえて転載の許しを戴きました。

昨秋に会員の方から投稿されたものです。一読させて戴き感動しました。(担当 泉)